

～～～～～目次～～～～～

- ① 巻頭言「BS ネットワーク」
- ② 2008年度第5回日本計量生物学会理事会議事録
- ③ 日本計量生物学会2009-2010年度新理事会議事録
- ④ 日本計量生物学会2009年度第1回対面理事会議事録
- ⑤ 2008年計量生物セミナー報告
- ⑥ 2009年度日本計量生物学会年会のご案内
- ⑦ 2009年度日本計量生物学会賞および功労賞候補推薦のお願い
- ⑧ IBC2012に向けて
- ⑨ 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い
- ⑩ 組織担当理事から
- ⑪ 国際担当理事から
- ⑫ 学会事務局からのお知らせ
- ⑬ 編集後記

～～～～～

① 巻頭言「BS ネットワーク」

佐藤俊哉 (会長・京都大学)

柳川堯元会長が、なぜか日本統計学会報 (No. 137, <http://www.jss.gr.jp/ja/PDF/K137.pdf>) に書かれていたのですが、biostatistics を専攻する学生さんたちと夏に「Biostatistics ネットワーク (BS ネットワーク)」を開催しています。わたしが大学院生のころは計量生物学を専攻している学生なんてほかにみたこともなく、統計関連の研究会や勉強会に足を運んでも『なにか違うなあ』という違和感がありました。それは扱っているテーマや方法論の違いであつたりもするのですが、いちばんことなつていたのは興味のおきどころだつたのではないかと思います。

統計を学んでいるほかの分野の学生さんたちの多くは、数理統計に興味があり、データは理論を応用するものでデータ自体に興味があるわけではない、あるいはその領域の研究テーマに興味があり、統計は単なる道具、解析ができさえすればいい、のどちらかが多かったように思います。わたし自身が専門としているのは、疫学領域の統計に関する事項全般ですが、わたしは計量生物学 biostatistics という学問は、生物・医学領域の問題解決に統計的アプローチを用いる学問だと信じています。ですから、勢い生物・医学領域の研究者との共同研究が主体となりますし、既存の統計手法で問題が解決するならばそれを使えばいいですし、それでは解決しないのであれば新しい方法を提案して解決する必要があるわけで、統計の理論的な興味は先行してデータは単なる応用、というわけではないし、実質的な興味は先行して統計は単なる道具、というわけでもないはずで

しかたなく、大学院時代はほとんどひとりで勉強や研究を行っていたのですが、ひとりで研究をしているとあるときとても不安になります。こんなことすでに解決済みなのではないか、からはじまって、ほんとうに今進んでいる方向で正しいのか、とんでもないひとりよがりの袋小路に入り込んでいないのか、もっと簡単な方法があるんじゃないか？ 最後はどう、いまやっていることは重要でもなんでもない、つまらないテーマなのではないかとまで考えました。(まあたいていはその通りだつたのですが。)

こんなとき気軽にディスカッションできる同じ志を持った仲間がいれば勇気づけられますし、気分も晴れることはアメリカに

行って経験しましたが、なによりも、

ビーンは自分以外のだれかこの問題について話しあいたいと切望した—ニコライか、教官たちのひとりでもいい。ひとりでは考えが堂々めぐりしてうまく発展しなかつた—外からの刺激がないと、自分の思い込みを打破することがむずかしかつた。自分だけで考えていても、自分なりの疑問しか浮かんでこないの、目からうろこが落ちるような体験はめつたにないのだ。(オーソン・スコット・カード, 田中一江訳, エンダーズ・シヤドウ (下), p. 282, 早川文庫 SF)

という具合に、なにごとにも討論がないとだめなんです。

もちろん、今では同じ研究室の仲間でディスカッションすればいいのですが、わたしの研究室はまだまだ学生が少ないので、もっと広い視野で biostatistics の勉強、研究をしてもらえればいいなど、東京理科大学、久留米大学、東京大学、北里大学の先生方の了解をとり、学生さんたちに呼びかけて研究会と懇親会をしています。もちろん主体はあくまでも学生さんで、柳川先生のレポートにもあるように、研究会でも学生さん同士の討論がひととおり終わらないと、われわれ先生たちの発言は許可されません。

BS ネットワークでの発表が計量生物学会での発表へ、そして2012年に神戸で開催する International Biometric Conference でのたくさんの発表へとつながってほしいですね。

② 2008年度第5回日本計量生物学会理事会議事録

山岡和枝 (庶務担当理事)

日時: 2008年11月29日(土)16:00 ~17:00

会場: 統計数理研究所2階研修室

出席: 岩崎 学, 上坂浩之, 大橋靖雄, 佐藤俊哉, 丹後俊郎, 松井茂之, 松山 裕, 山岡和枝

欠席: 折笠秀樹, 酒井弘憲, 菅波秀規, 浜田知久馬, 松浦正明, 南美穂子, 森川敏彦, 大瀧 慈 (委任状7通)

議題:

1. 事務局移転の件

庶務担当理事より、本件に関してはニュースレターと学会誌「計量生物学」には事務局移転の件をそれぞれ次号に掲載するよう手配したとの報告があり、このほかにはメーリングリストに流し、WEBに掲載することとして、特にシンフォニカから学会員全員に手紙等の連絡は不要としたということが提案され、承認された。

2. 機関別認証評価に係る専門委員候補者の推薦について

庶務担当理事より、9/30に理事に連絡した独立行政法人大学評価・学位授与機構長からの機関別認証評価に係る専門委員候補者の推薦依頼に対する候補者推薦がなかつたので、今回は学会として推薦を見送ることとしたとの報告があつた。

3. 選挙管理委員長からのコメント

選挙管理委員長から今回の選挙結果として、投票数が前回

に比べて多くなったとのコメントがあった。

4. 2008年計量生物セミナーについて

企画(シンポジウム)担当理事から計量生物セミナーの準備状況について、報告があり、記録集についてはフォーラムもしくは一般論文の形で投稿してもらいたいとの提案があり、承認された。

5. 2009年年会・企画セッション、チュートリアルについて(企画:年会担当理事)

企画(年会)担当理事より、2009年度年会の準備状況について報告があった。なお、2009年度の年会までは現在の担当理事が担当し、次の企画担当理事に引き継ぐことになっていることが確認された。また、チュートリアルについては応用統計学会と調整して内容を検討することになった。

6. 各担当理事からの報告

各担当理事より、次に示す担当からの引き継ぎ事項等のうち特に留意すべき点について口頭で述べられた。なお、上坂理事より、計量生物セミナーについて、テーマはあるが、特に若手の講師をできるだけ登用したいと考えたが講師が見つからないのが最大の問題であったこと、途上国援助のあり方も考える必要があることが指摘され、次期理事会に委ねることになった。なお、次期理事会の役割分担が決定次第、各担当理事からそれぞれの新規担当理事に必要な資料等を送付することが確認された。

7. IBC2012 LOC について

丹後会長より佐藤俊哉次期会長と相談し作成したIBC2012LOCの構成メンバー案が提案され、今後、各委員長からの提案を受けて12月中には決定したいという方針について承認された。

8. 会員の入退会に関して(庶務担当理事)

庶務担当理事より、現在の会員状況について報告があった。庶務担当理事より、現在あて先不明となっている2名については退会手続きをとりたいという申し出があり、承認された。

9. その他

最後に、理事会を終了するに当たり、丹後会長より2005年から2008年までの4年間にわたり、理事会活動を活発に進め、計量生物学会を盛り上げてくれたとの理事への感謝の意が表された。

③ 日本計量生物学会2009-2010年度 新理事会 会議事録

浜田知久馬(庶務担当理事)

日時: 2008年11月29日 17:00-17:30

場所: 統計数理研究所 研修室

出席: 上坂浩之、大橋靖雄、大森 崇、巖 浩、佐藤俊哉、丹後俊郎、服部 聡、松井茂之、松山 裕、森田智視、山岡和枝、三輪哲久(監事)

欠席: 和泉志津恵、酒井広憲、菅波秀規、浜田知久馬、三中信宏、森川敏彦(監事)

議事

1. 新理事会メンバー

佐藤会長より、専門領域と地域性を考慮して、和泉志津恵氏、上坂浩之氏、巖浩氏、服部総氏、三中信宏氏を会長指名

理事としたことが報告された。

2. 新理事の役割分担

役割分担について審議を行い、2009-2010年度は以下の役割分担で理事会を運営することが承認された。編集担当理事は編集委員会を、広報担当は広報委員会を組織し活動を開始する。なお広報委員会は旧理事会からの引き継ぎ事項である学会ホームページの充実(特に英文ページ)も担当する。これまで企画担当理事は年会とシンポジウムにわかれていたが今期より統合した。

会長	佐藤俊哉
庶務	大橋靖雄、浜田知久馬
会計	菅波秀規、森田智視
編集	松井茂之、三中信宏
会報	酒井弘憲、和泉志津恵
広報	巖 浩、三中信宏
企画(年会、シンポジウム)	上坂浩之、大森 崇、服部聡、和泉志津恵、三中信宏
組織	山岡和枝、松山 裕
国際	丹後俊郎、松山 裕、山岡和枝
学会賞	上坂浩之

3. 統計関連学会連合委員および統計関連学会連合大会委員に関して

統計関連学会連合理事会は現委員の丹後前会長、岩崎前理事から佐藤会長、大橋庶務理事に、ジャーナル検討委員会は松山理事から松井理事に交代することとし、ほかの委員会に関しては引き続き検討することにした。

4. 国際計量生物学会(IBS)の担当

IBSの担当は以下の通り。

Japanese Region:

Tosiya Sato (President)	1/1/2009-12/31/2010
Yasuo Ohashi (Secretary)	1/1/2009-12/31/2010
Chikuma Hamada (Secretary)	1/1/2009-12/31/2010
Hideki Suganami (Treasurer)	1/1/2009-12/31/2010
Satoshi Morita (Treasurer)	1/1/2009-12/31/2010

Biometric Bulletin Correspondent:

Kazue Yamaoka	1/1/2009-12/31/2010
---------------	---------------------

5. その他

・企画担当理事は次回年会までは旧企画担当理事が企画を行い、実務に関しては新企画担当理事が担当することを確認した。

・2009年度対面理事会の予定を、1月26日(月)、3月27日(金)、5月20日(水)、9月の統計関連連合大会時まで決定した。

④ 日本計量生物学会2009年度第1回対面理事会 会議事録

浜田知久馬(庶務担当理事)

日時: 2009年1月26日(月)18:00~20:00

会場: 東京理科大学九段校舎 6F 大学院ゼミ室

出席: 佐藤俊哉、上坂浩之、大橋靖雄、大森崇、菅波秀規、丹後俊郎、服部聡、浜田知久馬、松井茂之、松山裕、三中信宏、山岡和枝、森川敏彦(監事)

欠席: 和泉志津恵、巖浩、酒井弘憲、森田智視、三輪哲久

議題:

1. 2008年計量生物セミナー報告(企画担当理事)

企画担当理事から2008年計量生物セミナー報告がなされた。

参加者は会員25名、学生3名、非会員21名の計49名であった。

2. 2009年年会・企画セッション、チュートリアルについて(企画担当理事)

企画担当理事から2009年度の企画についての報告がなされた。

1) 年会プログラム

・チュートリアルセミナー: 統数研の江口真透氏「OMICSデータ解析のための機械学習」

・学会賞受賞者特別講演: 三輪哲久氏

・特別セッション 5/21 9:00~11:30 臨床研究におけるサロゲートエンドポイントの評価

2) 計量生物シンポジウム

企画セッションとして

奨励賞受賞者講演および計量生物シンポジウムの2つを連続したセッションとして申し込むこととした。シンポジウム案として「パンデミックに対する計量生物学の役割」が提案されたが、引き続き検討することとした。

3. IBC2012 LOCについて

国際担当 丹後理事から、LOCのメンバーとして鳩山由紀夫氏に依頼し、承諾いただいたことが報告された。

4. 編集委員会報告

編集担当 松井理事より、2009-2010年の編集委員会メンバーが提案され承認された。現在の投稿状況が説明され、2009年度は通常号2巻が発行予定であるが、特別号の発行予定がないことが報告された。電子ジャーナル化については薬剤疫学会等の情報を収集し、抄録のホームページ掲載を引き続いて検討することになった。

5. 会報について

ニューズレター99号についての予定が報告された。

6. 学会賞について

学会賞担当理事より、選考委員を決定したとの報告があった。推薦締め切りは3月31日とし、推薦依頼を次号の会報に掲載し、WEBには早急に掲載し、できるだけ多くの推薦をしていただくようお願いしたいとの意向が申し添えられた。

7. 会計報告

会計担当理事より、2008年度決算報告があった。乖離の大きかった印刷費の予算については年度末発行で支払いが2009年度になったことが説明された。その後、森川監事より監査報告がなされ、2008年度決算案が承認された。2009年度予算案については、為替レート、途上国援助、シンフォニカの委託費の値上げ等を考慮して、会計担当理事より、次回の理事会で2009年度予算案が提案されることになった。

8. 事務局の移転に伴う会則の変更

事務局の移転に伴う会則の変更が必要になり、次回の理事会で組織担当理事から変更案が提案されることになった。

次回

日時: 3月27日(金)第6回多重比較法国際会議終了後(17:00以降)

会場: 東京理科大学(神楽坂キャンパス, 森戸記念館)

⑤ 2008年計量生物セミナー報告

上坂浩之(企画担当理事)

2008年の計量生物セミナーを12月6日(土)午後、「臨床試験におけるベイズ統計の活用」のテーマで東京大学薬学部講堂にて開催した。医薬品の臨床開発において、探索段階ではベイズ統計が有効に活用されつつある。たとえば、抗がん剤の最大耐用量の推定におけるCRM(continual reassessment method)や第2相における有望な治療方式の探索では、すでに多くの理論的研究ならびに活用例が報告されている。また、最近では、一般の治療領域においても、患者を対象とした初期の探索試験において効果的に最小有効用量を推定する方法が適応的計画の枠組みで研究され、有効に活用しうる可能性が報告されている。今回のセミナーでは、ベイズ法の適用に詳しく、豊富な事例を経験されている2名の研究者をお招きした。Berry ConsultantsのScott Berry博士は「Bayesian Adaptive Dose-finding」の演題で、第2相におけるベイズ法の活用について、理論ならびに適用経験を紹介された。国立国際医療センターの石塚直樹博士は「CRMの理論と実装」の演題で講演され、抗がん剤の最大耐用量の推定における従来の方法の問題点を指摘し、それを解決するための方法としてのCRMの方法を詳しく紹介された。セミナー参加者は49名であった。セミナー開催と内容の案内から実施までの期間が1ヶ月足らずと短かったにも拘わらず、多数の方が参加され有意義なセミナーを開催することができた。

⑥ 2009年度日本計量生物学会年会のご案内

上坂浩之・三中信宏・和泉志津恵(企画担当理事)

2009年度日本計量生物学会年会を下記の要領で開催します。一般講演を募集しますので奮ってご参加下さい。本年会は応用統計学会の後援で実施され、両学会員は本年会、5月22日のチュートリアル(計量生物学会、応用統計学会)、並びに5月23日開催の応用統計学会年会共に、会員価格で参加できます。参加申し込みは4月3日(金)から4月24日(金)を予定しています。申し込み方法はプログラムの配布にあわせてご案内いたします。一般講演申込は下記6.をご参照下さい。

1. 日時: 2009年5月20日 13:00-18:00, 21日9:00-17:00, 22日 9:30-12:00(時間は変更の可能性あり)

2. 会場: 大阪大学銀杏会館

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-2

<http://www.office.med.osaka-u.ac.jp/icho/icho-jp.html>

3. 参加費:

正会員、応用統計学会員 年会・チュートリアルそれぞれ3000円、非会員5000円

事前申込 各500円引き

年会とチュートリアル一括事前申込の場合、両方合わせて1000円引き

学生(会員、非会員共)1000円。

4. 特別セッション: 5月21日9:00-11:30

セッション名: 臨床試験におけるサロゲートエンドポイントの評価: 臨床的視点と統計的視点(仮)

オーガナイザー: 手良向聡(京都大学)、松井茂之(統計数理研究所)

座長: 手良向聡(京都大学)

(1)本セッションの趣旨 手良向聡(京都大)、松井茂之(統計数理研究所)

(2) イントロダクション・背景

「Using and Validating Surrogate Endpoints Towards Accelerated Approvals」 折笠秀樹(富山大)

「統計的方法のオーバービュー」 竹村徹(帝人ファーマ株式会社)*, 小川幸男(日本イーライリリー株式会社), 上原秀昭(株式会社ツムラ), 西田朋由(ノボノルディスクファーマ株式会社)

(3) 前立腺がん試験におけるPSAの役割

「臨床の立場から」 樋之津史郎(京成大)

「統計の立場から」 田中司朗(京成大), 松山裕(京成大), 大橋靖雄(京成大)

(4) 胃がん術後化学療法の評価における全生存期間に対する無病生存期間の代替性

「臨床の立場から」 坂本純一(名古屋大)

「統計の立場から」 大庭幸治(京成大)

(5) 討論

内容・趣旨: 近年, 臨床試験におけるサロゲートエンドポイントの統計的評価に関する多くの研究が行われ, 様々な統計的規準が提案されている。しかし, 実際の臨床試験では, 事例ごとに慎重な検討が必要である。そこで欠かせないのは, いうまでもなく, 臨床的な視点である。本セッションでは, サロゲートエンドポイント評価の現状のレビューに続いて, 二つの臨床試験の事例を紹介する。それぞれの事例で, 臨床家からの臨床的視点の提示に対し, それに応える形で統計家から統計的視点を提示し, サロゲートエンドポイントの評価の仕方について議論する。一般論だけでなく, 個々の臨床試験での議論を知り, それに参加する機会は貴重である。本セッションが臨床家と統計家の更なる共同研究に資することが出来れば幸いである。

5. 特別講演: 5月21日午後 (昨年度学会賞受賞者による特別講演)

演題: 農業研究と多重比較手法

演者: 三輪哲久氏

6. 一般講演:

以下の分野毎に演題を募集します。

A. 臨床研究・臨床診断学, B. 疫学, C. ゲノム・バイオインフォマティクス, D. 農業・環境・資源, E. 医薬品・医療機器等, F. その他

応募の際にはご希望される分野名を必ずご指定下さい。

分野毎の演題募集には, 学会の独自性・特色をより打ち出し, 専門性を深めるといふねらいがあります。分野毎に, より踏み込んだ活発な議論を期待しております。会員の皆様の積極的なご発表をお願い致します。

(1) 申し込み方法:

発表者氏名, 所属(共同の場合は全員の氏名, 所属), 講演題目, 連絡先を明記の上, 電子メール, ファックスあるいは葉書で下記にお送り下さい。また, Biometric Bulletinへの掲載のためにお手数ですが, 講演題目, 発表者氏名, 所属についての英語版も合わせてお送り下さい。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階

(財)統計情報研究開発センター内

日本計量生物学会事務局

E-mail: biometrics@sinfonica.or.jp,

Fax: 03-3234-7472

HP: http://wwwsoc.nii.ac.jp/jbs/index_i.html

(2) 発表申し込み受付開始: 2009年3月2日(月)

(3) 発表申し込み締め切り: 2009年3月31日(火)

(4) 予稿原稿締切(必着): 2009年4月20日(月)

ご講演を申し込まれた方には予稿原稿執筆要領をお送りします。

7. その他:

(1) 年会期間中に日本計量生物学会総会及び学会賞授与式, 並びに評議員会を開催します。

(2) 年会後5月22日(金)午前にチュートリアルセミナーを開催予定です。

講師: 江口真透氏(統計数理研究所)

テーマ: ゲノムデータ・オミックスデータを解析するための新しい統計方法と機械学習の方法(仮)

(3) 5月23日(土)には応用統計学会年会が同会場にて, また22日(金)午後には応用統計学会チュートリアル(「テキストマイニングの基本的な考え方と諸種の実践事例」, 講師, 金明哲氏(同志社大学))が本年会と同会場にて開催されます。応用統計学会の参加費は正会員, 後援学会員3000円, 非会員5000円, 学生(会員, 非会員とも)1000円。

⑦ 2009年度日本計量生物学会賞および功労賞候補推薦のお願い

上坂浩之(学会賞担当理事)

日本計量生物学会は, 日本計量生物学会賞, 功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。これらのうち日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を決定いたします。また奨励賞は日本計量生物学会誌, *Biometrics*, *Journal of Agricultural, Biological, and Environmental Statistics*(JABES)等に掲載された論文の著者(単著でなくても第一著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を候補者として, 選定委員会にて受賞者が決定されます。今回学会賞および功労賞の推薦をお願いしています。自薦, 他薦いづれも受け付けています。学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞: 優れた原著, 総説, 著書を発表した正会員

功労賞: 会長経験者またはそれに準ずる学会活動を行った者, 顕著な研究成果を挙げた者, 顕著な教育実績を上げた者

下記の様式により日本計量生物学会賞, 功労賞いづれも学会賞選定委員会宛にお送りください。受賞者の発表と表彰は5月の日本計量生物学会総会で行います。いづれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします(推薦者は非公表です)。

推薦書の様式: A4版1枚に, 日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き, 本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名, 所属, 連絡先(住所, 電話, e-mail)
- 2) 推薦理由
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名(複数の場合は全員)
- 5) 推薦者(複数の場合は代表者)の所属および連絡先(住所, 電話, e-mail)

推薦締め切り期日: 平成21年3月31日(必着)

推薦書送付先: 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階

(財)統計情報研究開発センター内

⑧ IBC2012に向けて

IBC2012 組織委員会委員長 丹後俊郎

第 26 回国際計量生物学会議 The XXVIth International Biometric Conference (IBC2012) の日本での開催についてご連絡します。2008 年 12 月 10 日に受けた IBS Council からの正式な連絡により、2012 年 8 月 26 日～31 日での神戸開催が決定いたしました。現在、IBC2012 の組織委員会委員 (Local Organization Committee, LOC メンバー) とその下部委員会の LOC Finance and Raising Committee (IBC の費用面での計画と執行に責任を負う), LOC Contributed Papers and Publication Committee (プログラムの細部に責任を負う), LOC Registration and Social Affairs Committee (ローカルアレンジメント(登録, 宿泊, 食事, ツアーなど)に責任を負う), および Advisory board を以下のように組織し, 理事会の承認を受けて, 現在, IBC2012 の President となる Kaye Basford 氏に案として提案しております。IBS からの承認を受けて正式な組織委員会として発足することになります。微力ながら私が組織委員長を務めさせていただきますが, 大会の成功に向けて全力を尽くして参る所存です。今後の日本の生物統計学の発展に向けて, 以下の方々をはじめ, 会員の皆様のご協力と積極的なご参加をお願いしたいと思います。どうぞ, よろしくお願いたします。

IBC2012 Local Organizing Committee (LOC) (proposal)

Chair: Toshiro Tango National Institute of Public Health
 Chikuma Hamada Tokyo University of Science
 Hao Yan EPS Co., Ltd.
 Manabu Iwasaki Seikei University
 Hirohisa Kishino University of Tokyo
 Yutaka Matsuyama University of Tokyo
 Mihoko Minami Institute of Statistical Mathematics
 Tetsuhisa Miwa National Institute for Agro-Environmental Science
 Toshihiko Morikawa
 Yasuo Ohashi University of Tokyo
 Tosiya Sato Kyoto University
 Hiroe Tsubaki Institute of Statistical Mathematics
 Hiroyuki Uesaka Lilly Research Laboratories Japan
 Kazue Yamaoka National Institute of Public Health
 Thomas Louis Johns Hopkins University, USA
 Yukio Hatoyama Member of the House of Representatives
 Takashi Omori Kyoto University

Committees

•LOC Executive Committee

Chair: Toshiro Tango National Institute of Public Health
 Secretary: Kazue Yamaoka National Institute of Public Health
 Members:

Hao Yan EPS Co., Ltd.
 Chikuma Hamada Tokyo University of Science
 Yutaka Matsuyama University of Tokyo
 Tetsuhisa Miwa National Institute for Agro-Environmental Science
 Yasuo Ohashi University of Tokyo
 Tosiya Sato Kyoto University

•LOC Finance and Fund Raising Committee

Chair: Hao Yan EPS Co., Ltd.
 Chikuma Hamada Tokyo University of Science
 Satoshi Morita Yokohama City University
 Hideki Origasa University of Toyama
 Hideki Suganami Kowa Co., Ltd.
 Kunihiko Takahashi National Institute of Public Health

•LOC Contributed Papers and Publication Committee

Chair: Yasuo Ohashi University of Tokyo
 Hirohisa Kishino University of Tokyo
 Shigeyuki Matsui Institute of Statistical Mathematics
 Yutaka Matsuyama University of Tokyo
 Masaaki Matsuura Japanese Foundation for Cancer Research
 Mihoko Minami Institute of Statistical Mathematics
 Tetsuhisa Miwa National Institute for Agro-Environmental Science
 Toshihiko Morikawa
 Hiroshi Nitta National Institute for Environmental Studies
 Hiroe Tsubaki Institute of Statistical Mathematics
 Hiroyuki Uesaka Lilly Research Laboratories Japan
 Kazue Yamaoka National Institute of Public Health

•LOC Registration and Social Affairs Committee

Chair: Tosiya Sato Kyoto University
 Toshimitsu Hamasaki Osaka University
 Shizue Izumi Oita University
 Takashi Omori Kyoto University
 Takashi Sozu Osaka University
 Satoshi Teramukai Kyoto University Hospital

Advisory board

Thomas Louis Ex-President, IBS,
 Johns Hopkins University, USA
 Takashi Yanagawa Ex-President of BSJ
 Isao Yoshimura Ex-President of BSJ

⑨ 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

松井 茂之 (編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる, 会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため, 以下の 5 種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし, 理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し, その現状, 将来への課題, 展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め, 新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて, 適切な回答例を提示, または討論を行う。なお, 質問者(著者)名は掲載時には匿名可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問, 反論, 意見。

論文投稿となると, 「オリジナリティーが要求される」, 「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが, 上記の「研究速報」, 「コンサルタント・フォーラム」は, そのような会員のために設けられた場であり, 活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。投稿に際しては, 雑誌「計量生物学」に記載されている

投稿規程を参照ください。

また、2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES」に掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書く公募の際に引け目を感じるくらいです。会員諸氏の意欲的な論文投稿をお待ちしております。

⑩ 組織担当理事から

山岡和枝・松山 裕(組織担当理事)

本学会が評議員制度を発足してから5年目を迎えました。また、さまざまな環境の変化に伴い、会則の見直しなども行われてきました。これからも本学会の運営がスムーズにいくように、会則をはじめ、組織の問題点などがありましたらできるだけ改善するように図ってまいりたいと考えております。会員の皆様からの積極的なご意見もぜひ、お寄せください。これから2年間、どうぞ、よろしく願いいたします。

⑪ 国際担当理事から

丹後俊郎・松山 裕・山岡和枝(国際担当理事)

国際担当として、日本の生物統計学の国際化・発展のためにEAR-BCの東アジアでの開催やIBC2012開催に向けて国際交流を促進し、Bulletinなどへの日本からの情報発信を積極的に行っていきたいと考えております。会員の皆様からIBSへのご意見やご提案等がありましたら、担当理事あるいは事務局までご意見をお寄せください。

⑫ 学会事務局からのお知らせ

事務局の移転に伴う書庫の整理のため、学会誌「計量生物学」のバックナンバーの無料配布(ただし郵送料は受取人負担)を行います。

無料配布可能な号や申込方法等は、学会Webに掲載いたしますので、そちらをご確認下さい。

⑬ 編集後記

またまた花粉症の季節到来です。体を動かすことが嫌いな編集子にとっては、唯一の趣味のスポーツ、スキーの季節でもあり、嬉しい反面、辛い季節でもあります。

海の向こうでは、民主党政権となり、医薬品業界にも風当たりが強くなりそうなんて限定された問題ではなく、世界全体で不況の風が吹きまくって大変な状況に陥っていますが、こういうときこそ原点に立ち返ってみるのが大事なのではないのかなと考える次第です。

おこがましい物言いかもしませんが、私たちは「患者さんのために、患者さんの命を預かる」仕事に従事しているのだという初心を忘れないようにしたいと思います。

私たちがのようにデータを扱う業務に従事していると、ややもすると直接、患者さんや医師の方々と接する機会が少ないために、そういった気持ちが希薄になりがちですが、一製薬企業

の立場というよりは、広く健康・医薬産業に従事している者として、やはり忘れてはならないことなのだ改めて思います。昨年のお正月頃、曹洞宗永平寺78世住職梅崖奕保禅師が、106歳の長寿を全うし遷化なさいました。数年前に禅師の日常を追ったドキュメンタリー番組で、「修行とは真似ること。1日真似ても、2日真似ても、真似は真似だが、一生続ければ誰もそれを真似だとは言わないものだ」と飄々と語っておられたのを、たまたま観て感銘を受けました。およそ宗教家の話など興味もない編集子ではありますが、遠に自分の年齢の倍以上生きてきた人生の大先輩の言葉はそれなりに心に響くものがありました。おそらく禅師はとて不器用な方だったのではないのかなと思うのです。しかし、その不器用さゆえに多少器用な(あるいは器用と思っている)者には真似のできないような愚鈍さ、実直さで十年一日の如く同じ修行をずっと繰り返されてきたのでしょう。80年、90年にわたる我々には想像すらつかない永い修行時間が凝縮して自然に言わしめた言葉なのだと思います。

耐久消費財である自動車を3年毎のモデルチェンジに合わせて買い換えさせようとしてきたこれまでの自動車各社の戦略も、今回の世界的な不況のなかで大きく見直さざるを得ず、消費者自身も自分たちの愚行に気づき始めたことが、この3月期の自動車各社の決算の数字の一因になっているような気がします。昨日まで世界の超優良児といわれ、賞賛されていた会社が一瞬にして赤字転落してしまう世の中です。トヨタの創業者が何を考えて自動車産業を日本に根付かせようとしたのかは浅学にしてわかりませんが、創業者には、きっと高邁な理想があったはずで、私の敬愛する実業家の一人で、三菱財閥四代目社長、岩崎小彌太は1920年に「三菱三綱領」を制定しました。すなわち、「所期奉公」、「処事公明」、「立業貿易」です。「共生/社会貢献」、「コンプライアンス」、「グローバル化」と言い換えてもよいかもしれません。80年前の理念が未だに色褪せていませんし、いま、改めて問われている問題そのものでもあります。原点に立ち返るということは決して後ろ向きではないと思うのです。

「統計」の原点は、語源からすると「国家」ですが、そこまで遡ってしまうと訳がわからなくなってしまうので、せめてK.Pearsonが、「統計」は「科学の文法」であると喝破した原点を忘れないようにしたいと思います。

日本橋の河岸より

計量生物学会ニューズレター99号
2009年2月27日発行
発行者 日本計量生物学会
発行責任者 佐藤俊哉
編集者 酒井弘憲, 和泉志津恵